

令和6年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書

障害のある人の 社会参加について考える

～文化芸術を通じた共同創造の試み～



はじめに

昨今、障害のある人への福祉サービスは充実し、様々な障害についての認知度も向上してきました。しかし、福祉制度のはざまに置かれている人や、障害特性への理解が進んでいないことから福祉サービスが届きにくく、安心して充実した地域生活を送ることが難しい状況にある人も少なくありません。また、制度上は様々なサービスを利用できる一方で、充実した社会参加が叶わない人もいます。その人たちを取り巻くニーズとは何か、どのような支援が必要とされているのか。社会福祉法人グロー（GLOW）が行う、地域ケアサービス推進事業（滋賀県補助事業）は障害特性による生きづらさやニーズに応じた支援のあり方を探り、モデル的な実践を行ってきました。

今年度は、まち歩きをテーマとしたワークショップをきっかけに、盲ろう者のアクセシビリティ（社会参加のしやすさ）という視点で支援のあり方について研究しました。昨年度に引き続き、障害当事者、支援者、学生、講師らと協力して企画を考え、地域の資源を活用し、ワークショップを実施しました。これまで芸術鑑賞会等で取り組んできた工夫や合理的配慮を様々な場面に広めるとともに、質の高い社会参加の実現に着目しました。障害のある人が地域において主体的に参加できる活動の幅が広がり、その質が保障されるように、アクセシビリティの向上を図る試みです。

また、現代において糸賀一雄氏の思想に通底する実践を行っている人の考えや活動を「SHIGA-FUKU」（シガフク）というウェブサイトで発信しています。障害福祉領域だけでなく、共生社会の実現につながる様々な取り組みについて、幅広く活躍する実践者を取材しました。併せて、福祉現場で働く人等のネットワークづくりの場として、過去に取材した方々を招いたトークイベントを開催しました。「制度のはざま」に向き合い、活動している実践者へのインタビューに加え、本イベントのレポートを併せて掲載しています。

前述の事業に加え、今年度は新たに障害児・者等の文化芸術による共生社会づくり研究事業の取り組みを始めました。この事業は県内において障害児入所施設の子どもやフリースクールに通う子どもなどを対象に、文化芸術・表現活動を通して、児童の自己肯定感、自己効力感を高めること、児童の自己表現する力を伸ばしていくことを目的に、これまで障害のある人との文化芸術活動を行ってきたノウハウを活かし、音楽、ダンス、美術など様々なジャンルからワークショップ講師を招き、プログラムを展開しました。

誰もが安心してその人らしい生活を送ることができる共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある人とともに文化芸術をはじめとする様々な活動を楽しむことにより、地域において相互理解が深まることを期待します。

2025年3月
社会福祉法人グロー（GLOW）～生きることが光になる～
法人企画局 地域共生部

目 次

はじめに

目 次

第1章 地域ケアサービス推進事業について

- 1 事業目的.....3
- 2 研究課題
- 3 実施内容
- 盲ろう者と学生によるまち歩きワークショップ.....4

第2章 糸賀一雄研究・普及啓発活動について

- 1 事業目的.....18
- 2 活動内容
- ①ウェブサイト「SHIGA-FUKU」の運営
- ②トークイベントの開催.....21

第3章 障害児・者等の文化芸術による共生社会づくり研究事業について

- 1 事業目的.....26
- 2 研究課題
- 3 事業内容
- 信楽学園での実践
- (1) 導入編.....27
- (2) 音楽ワークショップ.....28
- (3) ダンスワークショップ.....34
- (4) 美術ワークショップ.....37
- 考察.....41

おわりに.....42

第1章 地域ケアサービス推進事業について

1 事業目的

誰一人取り残さない共生社会づくりに向けて、制度のはざまにある障害のある人たちのアクセシビリティ(社会参加のしやすさ)という視点で支援のあり方について研究し、合理的配慮の進展とアクセシビリティの向上につなげていくことを目的とします。

2 研究課題

障害のある人が安心して充実した地域生活を送れることを目的に、障害のある人のアクセシビリティの拡充を「参加する活動を選択できること」と捉え、文化芸術活動を切り口に研究しました。

研究課題として着目したのは「制度のはざま」に置かれている盲ろう者のアクセシビリティです。

「制度のはざま」とは、1つは「支援の届きにくさ」を意味します。「盲ろう」という障害特性への理解が進んでいないことから、地域でその存在や生きづらさが可視化されないまま、十分なサポートを受けることなく、地域での様々な経験から遠ざかっている人たちがいます。コミュニケーションや移動に困難さがあったり、自ら情報を入手しにくい環境にあたりすると、幅広い活動を楽しむことは叶いません。本来の意味で、「選択できる」状況を作るためには、参加しやすい活動が地域に増え、興味や関心を持つきっかけとなる経験を積み重ねられることが重要だと考えます。

もう1つの「制度のはざま」は、「社会参加の質が保障されないこと」です。文化芸術を鑑賞するための情報保障やサービスの提供は、国の「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画」に明記されており、制度上は様々なサービスを利用することができ、合理的配慮も普及しつつあります。しかし、制度の範囲内で保障された支援にアクセスできたとしても、それだけで「本当に充実した社会参加」につながるとは限りません。また、制度上、十分な支援を受けにくい状況にある盲ろう者は、とりわけ社会参加の質が保障されにくい立場に置かれているといえます。制度の整備が進むと同時に、参加する活動の質が向上することもアクセシビリティの拡充に欠かせない要因です。

上記を踏まえ、制度のはざまにある盲ろう者が、参加する活動を選択できる社会をつくるという視点に立ち、実践を行い、その成果を考察しました。

※本書における「アクセシビリティ」について

アクセシビリティとは、高齢者や障害者等も含めたあらゆる人の、情報やサービスへのアクセスのしやすさという意味で使われるのが一般的です。しかし、本書においては、「令和6年度障害者地域生活移行促進事業 地域ケアサービス推進事業」の要綱にならい、「障害のある人の社会参加のしやすさ」という意味で使っています。

3 実施内容

盲ろう者と学生によるまち歩きワークショップ

(1)目的

盲ろう者(※1)のアクセシビリティ向上を目的に、「文化芸術を楽しむ」ということに着目し、盲ろう者と学生とともに、まち歩きを楽しむワークショップを行いました。また、そのまち歩きで感じたことや体験したことをより多くの人へ届けることを目的に、盲ろう者、支援者、学生による発信ツールとしてウェブサイトの作成にも取り組みました。

事業には盲ろう者2名、NPO法人しが盲ろう者友の会事務局員2名、大学生5名に検討委員として参加していただきました。また、まちづくりやコミュニティデザイン、福祉分野での実績が豊富なデザイナーに事業全体のディレクターとして、ウェブ制作やプロダクトデザインの実績が豊富なデザイナーにコミュニケーションツールや発信ツールのデザイナーとして参加していただくことで、まち歩きと成果物の制作ともに、より多角的な視点を取り入れた事業を実施することができました。



制作したウェブサイトやワークショップの様子は、ボードレス・アートミュージアム NO-MAのアーカイブサイトでご覧いただけます。

ケアしあうミュージアム ～盲ろう者と学生によるまち歩きの取り組み～

<https://care.no-maarchive.com>

※1 目(視覚)と耳(聴覚)の両方に障害があることを「盲ろう」と言います。見え方や聞こえ方の程度は、全盲ろう(全く見えなくて、全く聞こえない)から弱視難聴(少し見えて、少し聞こえる)まで様々です。コミュニケーション手段は、触手話、指点字、点字、手のひら書き、音声、筆記等があります。

※2 この事業は、ボードレス・アートミュージアムNO-MAを中心に、様々な立場の人たちと文化的な活動をともにするプロジェクト「ケアしあうミュージアム」の一環として行われたものです。

主 催: ケアしあうミュージアム事業実行委員会

助 成: 令和6年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業

(2)検討委員

川瀬富美子(盲ろう者)

北川雅貴(盲ろう者)

野中美智子(NPO法人しが盲ろう者友の会事務局員／支援者)

萩原さつき(NPO法人しが盲ろう者友の会事務局員／支援者)

下井一夫(滋賀大学学生)

川井心愛(滋賀大学学生)

宮下晶(滋賀大学学生)

T・K(滋賀大学学生)

瀬戸口晴(成安造形大学学生)

ディレクター 竹岡寛文(株式会社タケコマイ)

デザイナー 南和宏(南和宏デザイン事務所)

(3)実施概要

検討会議①

日 時:2024年7月29日(月)10:30~12:00

会 場:能登川コミュニティセンター多目的室5(東近江市)

参加者:10名(盲ろう者1名、通訳介助者2名、支援者2名、ディレクター、デザイナー、事務局／支援者3名)

内 容:事業説明およびまち歩きワークショップ内容の検討



検討会議②・制作会議①

日 時:2024年9月23日(月・祝)10:00~12:00

会 場:能登川コミュニティセンター学習室1(東近江市)

参加者:17名(盲ろう者2名、通訳介助者4名、支援者2名、学生5名、ディレクター、デザイナー、事務局／支援者2名)

内 容:まち歩きワークショップ内容の検討、制作物の検討



まち歩きワークショップ①

日 時:2024年10月14日(月・祝)10:00~16:00

会 場:まちや倶楽部、NO-MA周辺(近江八幡市)

参加者:20名(盲ろう者2名、通訳介助者6名、支援者2名、学生3名、ディレクター、デザイナー、実行委員1名、事務局／支援者4名)

内 容:盲ろうについての勉強会、作品鑑賞、昼食会、振り返り、まち歩きルートの検討



まち歩きワークショップ②

日 時:2024年11月9日(土)10:00~16:00

会 場:まちや倶楽部、NO-MA周辺(近江八幡市)

参加者:19名(盲ろう者2名、通訳介助者4名、同行援護2名、支援者2名、学生5名、ディレクター、デザイナー、事務局／支援者2名)

内 容:まち歩きワークショップ、振り返り



制作会議②

日 時:2024年11月30日(土)13:30~15:00

場 所:八幡コミュニティセンター多目的室A・B (近江八幡市)

参加者:17名(盲ろう者2名、通訳介助者4名、支援者2名、学生4名、ディレクター、デザイナー、事務局／支援者3名)

内 容:制作物内容の検討



制作会議③

日 時: 2025年1月12日(日)10:30~12:00

場 所: 旧伴家住宅 マントヴァ(近江八幡市)

参加者: 10名(支援者2名、学生4名、ディレクター、デザイナー、事務局/支援者2名)

内 容: 制作物(ウェブサイト)の内容検討



振り返り会

日 時: 2025年2月16日(日)10:30~12:00

場 所: 能登川コミュニティセンター多目的室2(東近江市)

参加者: 13名(盲ろう者1名、通訳介助者2名、支援者2名、学生4名、ディレクター、デザイナー、事務局/支援者2名)

内 容: ウェブサイトおよび案内カードの内容確認、事業の振り返り



(4)事業実施におけるアクセシビリティの気づき

検討会議①

第1回目の検討会議では、事業説明とまち歩きワークショップの内容検討が議題となりました。盲ろう者と学生によるまち歩きワークショップを考えるにあたり、今回参加する盲ろう者にとって「まちを歩く」という感覚やイメージがどのようなものかを確認しました。

盲ろう者からは「外出は買い物のためにショッピングセンターに行くことがある」「一人で外出することはできないので、通訳介助者や同行援護といったサービスを利用して買い物をする」といった意見が聞かれました。私たちが「まち歩き」からイメージするものは、旅行や観光の際に現地で計画を立てたり、ぶらぶら歩いたり、食べ歩きをすることですが、盲ろう者にとって「まち歩き」に対するイメージは持ちにくく、「まちを歩く」という意味での「買い物など日常生活を送る上で必要な目的がある外出」といイメージはしやすいことがわかりました。言葉から受け取るイメージがお互いに異なることがわかりました。

他にも「移動で船やバスに乗ることは問題ないが、あまりに長い時間だと運ばれるだけになり、移動だけで疲れてしまう」「食べたりすることはぜひ取り入れてほしい」といった意見も聞かれました。一般的には、旅行などで観光バスやフェリーを利用して長距離の移動を楽しむことができますが、盲ろう者にとっては、長時間の移動が負担になることもわかりました。一方で、「食」を楽しむことは共通の楽しみであることもわかり、誰もが楽しめる「まち歩き」のあり方を考える第一歩となりました。



検討会議②・制作会議①

2回目の検討会議からは学生5名が参加し、まち歩きワークショップの内容について具体的な場所や時間、成果物に関して全員で意見交換を行いました。学生にとって盲ろう者と初めて出会う場であったため、お互いの自己紹介や手のひら書きの体験など、コミュニケーションをとる時間を設けました。

触手話でコミュニケーションをとっている様子を見たり、通訳介助者から手のひら書きの方法を教わりながら実際に文字を指で書いたりしたことは、学生にとって、これまで知らなかった盲ろう者の存在を身近に感じるきっかけになりました。また、日常生活において「盲ろう者の人がいたら」というイメージを持つことができるようになりました。

まち歩きワークショップ①

盲ろうについて知ることを目的として学生を対象に、盲ろう者の検討委員である川瀬さんと北川さんから自身の経歴や生活の工夫などをお話いただく勉強会を実施しました。お二人からは、幼少期のエピソード、点字が読めるようになった経緯、連絡手段、買い物時の工夫など、実生活に関する話をしただき、学生にとっては盲ろう者の生活についてより深く知る機会となりました。

現状として、盲ろう者が自身のことを語る機会、そして学生がそういった場に参加する機会はそれほど多くありません。今回の勉強会では、「盲ろう」という障害は人によって経過が異なること、外出にサービスが必要なことなどの基本的な知識を得たり、買い物や外出時に「こんな場面ではどうしているんだろう」と疑問を抱いて質問したりすることで、さらにコミュニケーションを深めながらお互いを知る機会となりました。

盲ろう者の知覚世界を体験することを目的に、盲ろう者と学生が2つのグループに分かれてボードレス・アートミュージアムNO-MAで展示していた陶芸作品と過去に制作した鑑賞サポートツールを使って鑑賞会を実施しました。学生の検討委員にはアイマスクを着用してもらい、見えないできるだけ静かな状態で作品をさわった後、学生は声を発し、通訳介助者を通して、川瀬さん、北川さんとは対話しながらさらに作品をさわって、最後にアイマスクを外して見える状態で鑑賞しました。

触覚を使った鑑賞は、作品を隅々までさわって想像することで、作品をじっくり味わえるという魅力があります。今回の鑑賞会でも、盲ろう者と学生が同じ目線で作品を楽しむために、全員に触覚を使って作品を鑑賞してもらいました。

実際にさわって鑑賞すると、陶芸作品をサンゴ礁のようだと表現する人もいれば、たくさん空いている穴に花を生けたらお花畑になると表現する人もいて、感じたことをありのまま共有することでお互いの感じ方を知ることができました。

昼食は盲ろう者の知覚世界を理解するためのきっかけづくりの場となるよう、全員が同じお弁当を食べて味や食感を共有することにしました。お弁当を注文した食堂やポネシアの店主に事前にお弁当について説明してもらうよう依頼し、盲ろう者にとって安心できる時間づくりを目指しました。

まず、参加者全体に向けて、お弁当に入っているおかずの内容や配置を、絵を用いて説明していただきました。店主からの説明が終わってからも、絵を見ながらおかずの内容について盲ろう者と話す学生や支援者の姿が見られました。このように、視覚的なツールを活用することが、盲ろう者に情報を伝える際、わかりやすさにつながる事が分かりました。

昼食後、全体で振り返りを行い、それぞれが勉強会、作品鑑賞会、昼食を通して感じたことや感想をシェアしました。また、昼食の時間から、本事業の副実行委員長である広瀬浩二郎さんも参加され、まち歩きについてのアドバイスをいただきました。

全体振り返りの後は、盲ろう者以外の検討委員が二つのグループに分かれて実際にまちを歩きました。学生が主体となって「盲ろう者の二人がまちを巡るとしたら」という視点で午前中に学んだことや感じたことを活かしたルート検討を行いました。

一つのグループは、NO-MAに咲いている植物を触ったり、香りを感じたり、外壁を触り比べたりして、町並みを感じるまち歩きを検討しました。もう一つのグループは、教会、古美術商店、旧八幡郵便局に行って建物を触ったり、飲食店の近くを歩いて香りを感じたりして、スポットを感じるまち歩きを検討しました。

普段何気なく歩いている道でも、意外と段差が多かったり、人の往来が多いとすれ違う際に車道にはみ出してしまう可能性があるなど、障害のある人、特に盲ろう者が安心して外出するためには配慮が必要な場所が多いことがわかりました。これも、盲ろう者の立場に立ってまちを歩いたからこそ生まれた気づきと言えます。



まち歩きワークショップ②

どちらのグループも、「盲ろう者の二人が楽しめるまち歩き」には「触れる」と「香り」を楽しむことを条件として検討しており、作品鑑賞や昼食などを通して感覚を共有しておくことの意義が見えました。他にも、川瀬さんと北川さんが安全に通れる道かどうか、車通りはどうかなど、盲ろう者友の会支援員の野中さん、萩原さんからアドバイスをもらいながら、安全性にも考慮したルートを考えていました。

まち歩きワークショップ①の後、二つのグループに分かれて検討した内容をもとに、無理なく取り組めるか、安全にめぐることができるか、そして参加者全員がまちを楽しめるかどうかという視点で「町並みを楽しむ」「スポットを楽しむ」という両方の要素を取り入れたまち歩きに決まりました。

まち歩きワークショップの参加者は同行援護、通訳介助者を含めた19名となり、全員が同じ場所を歩くよりは、少人数でコンパクトに歩くほうが、盲ろう者と学生とがコミュニケーションを取りやすいこと、道に留まる人数が少ない方が安全性が高いことから、2つのグループにわかれて歩きました。まち歩き後、全体で感想を共有できるように右回り、左回りのルートに分かれて歩くことにしましたが、片方の距離が少し長くなってしまうことがわかり、車椅子を利用している川瀬さんには短い距離のルートを、北川さんには長い距離のルートを歩いてもらうことにしました。まち歩きの後、北川さんからは「もっと長い距離でも、長い時間でも大丈夫です」というコメントもあり、人によって楽しめる距離や時間は異なりますが、このまち歩きワークショップでは参加者全員が無理なく取り組むことができました。



「食」についてもまち歩きに欠かせない要素の1つです。旅行や観光地に行った際には、その土地のものを食べ歩いて楽しむ人も多いのではないのでしょうか。今回のまち歩きでも盲ろう者とともに食べ歩きをすることを検討しました。しかし、実際に歩いてみると車通りが多く、安心して立ち止まれる場所が少なく、混雑状況や周囲の交通状況を判断することが求められる食べ歩きは、安全面でのハードルが高いことがわかりました。また、そもそも盲ろう者が移動しながらコミュニケーションを取ることが難しい現状があり、食べ歩きの醍醐味である食事の感想をその場でシェアすることにもハードルがありました。そこで、まちの食べ物を安全に楽しむため、歩くルートの付近にあるお店の食べ物をテイクアウトし、座ってゆっくり食べられる場所を用意して、みんなが同じものを食べて感想を共有することにしました。サンドイッチ、はちみつ、紅茶は2種類ずつ用意し、食べ比べができるようにしたことも楽しむポイントの一つです。



他にも、お土産選びを取り入れたことも楽しむ工夫の1つです。立ち寄りスポットの1つである古美術商店の商品であるピンバッチを商品カゴごとお借りして、グループごとに学生と盲ろう者とで選びあう時間を設けました。たくさんあるピンバッチの中から川瀬さん、北川さんには学生をイメージして1つずつ選んでもらう予定でしたが、あまりに多すぎると選ぶのが難しいという支援者のアドバイスもあり、いくつかピックアップして選んでもらうことにしました。

学生は色など見た目だけでなく、形やさわったときの感触（つるつるしているか、ザラザラしているか）など、触覚を使ったり、書いてある文字がどんな意味なのかを調べたりと、選ぶときに工夫が見られました。



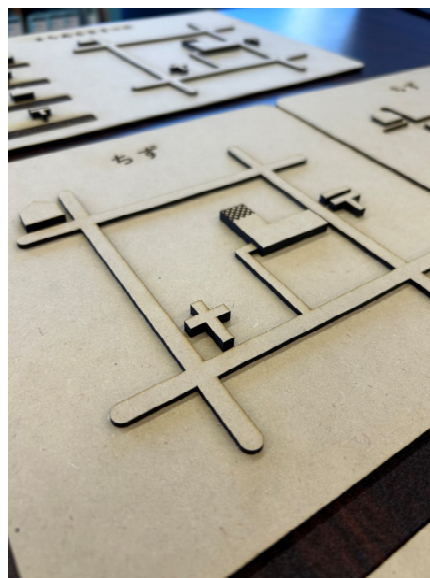
今回、学生に立ち寄りスポットの説明担当や食事の説明担当といった役割をお願いしたことで、盲ろう者にとって「〇〇をしていた□□さん」という具体的に人のイメージが付きやすいことは、安心して関わるることができる人が増えることにつながったと考えられます。

また、お店や立ち寄りスポットのスタッフの皆さんにご協力いただくため、事業について説明した際、どのお店のスタッフも快く引き受けてくださったことがとても印象的でした。また、この取り組みを通して盲ろう者の存在を知ってもらうきっかけにもなりました。お互いがどんな人かを知り、そして知っている人が地域に多くいることは、安心した地域生活を送る上で欠かせない視点です。

さわる地図の作成

今回のまち歩きワークショップを実施するにあたり、「盲ろう者がまち歩きを楽しむには」という視点から、歩くルートを「さわる地図」にすることを検討しました。見えず、聞こえない状態でただ街を歩くだけでなく、地図をさわることで自分の現在地を把握し、スポット間の移動過程を楽しめるようにすることが目的です。

まず、まち歩きワークショップのルートを確認し、「さわる地図」の制作が開始されました。この際、ディレクターとデザイナーが重視したのは、「当事者の使いやすさ」だけでなく、「作りやすいかどうか」という視点です。材料の入手しやすさや費用の抑制なども考慮しながら、制作に取り組みました。点字の表記ルールを学ぶ必要がある一方、デザイナーが普段使用する技術を応用すれば、点字を組み込むハードルはそれほど高くありません。そのため、「さわる地図」の制作プロセスに関する情報を福祉関係者やデザイン関係者に共有することで、デザイナーが障害のある方々と関わる機会が増え、デザインのノウハウを活かしたツール制作がさらに広がる可能性があります。他にも点字だけだと一緒に参加している学生が理解することが難しいため、スポットをアイコンにするなど共有できるツールを目指した「ユニバーサル」な視点もポイントの1つです。



もちろん、実際に利用する盲ろう者にとっての使いやすさも重要なポイントです。そのため、試作品をいくつか作成し、北川さんと川瀬さんにレビューを依頼しました。このレビュー内容を基にした検証結果は、ホームページに詳細が記載されていますので、ぜひご覧ください。

実際に「さわる地図」を手持ってまち歩きを行う際、通訳介助者が盲ろう者に「今ここにいます」と現在地を伝えるツールとして活用されていました。また、スポット間を移動する際にも「今ここにいます。これからここに移動します」と事前に伝えることで、盲ろう者が安心して活動できる要素の一つとなっていました。

制作会議②

2回のまち歩きワークショップの成果をもとに、検討委員全員で成果物について意見交換を行いました。これまでの勉強会では、盲ろう者がピンディスプレイ(パソコンの画面情報を点字や点図の形でリアルタイムに表示する機器)などの支援機器を活用してメールやウェブサイトなどで情報の取得ややり取りをしていることを学びました。また、盲ろうについて知らない人に伝え、広めるためのツールとしても有用であると考えられることから、ウェブサイトの制作を検討しました。今回も、川瀬さんと北川さんに、ウェブサイトがどれほど身近なものであるかについてお聞きしました。お二人からは、全国盲ろう者協会に直接メールで問い合わせたり、点字の新聞などで情報を得たり、自分でインターネットに接続して検索し、必要な情報にアクセスしているとお話を伺いました。また、情報を得る際に、長い文章を点字ですべて読むのは疲れることがあるため、途中で読むのをやめてしまうこともあるといいます。そのような場合は、しが盲ろう者友の会に事前に文章を送付し、通訳介助者を通じて内容を伝えてもらうなどの工夫をされているそうです。さらに、ニュースの記事にカタカナや英語の単語が増えているため、理解しづらいと感じることもあるとの意見がありました。文字量や表現のやさしさを考慮することは、盲ろう者にとって情報を得やすくなることが分かりました。

制作会議③

盲ろう者以外の検討委員が、ウェブサイトに掲載する内容について議論しました。学生からは、「まち歩きワークショップの内容が伝わるもの」や「盲ろう者の暮らしについて詳しく掲載したい」といった意見が挙がりました。特に、盲ろう者の暮らしに関しては、学生自身が今回の事業に参加する中で、「盲ろう者のリアルな情報を知りたい」とウェブサイトを検索しても、欲しい情報が見つからない、あるいはそういった情報がそもそも十分に掲載されていないことに気づいたため、この機会を活用して盲ろう者について発信し、情報を必要とする人々に届けたいという意見が出されました。

ウェブサイトの構成としては、事業全体の概要、盲ろう者について、まち歩きワークショップについて、さわる地図の解説、という形を採用することになりました。また、学生には、今回のまち歩きワークショップに参加して感じたことや考えたことを原稿にまとめてもらい、その文章をウェブページ内でコメントとして掲載する方針としました。

ウェブサイトの制作

ウェブサイトの制作にあたり、より多くの人に情報を届ける方法を検討しました。現在、多くのウェブサイトでは、グラフィックや写真、デザインを活用し、視覚的に訴えることで情報を伝えています。しかし、この手法では、点字ディスプレイや音声読み上げ機能を活用して情報を得る人々と、視覚で情報を得る人々との間で、得られる情報の量に差が生じてしまいます。

そこで、今回の取り組みでは、ウェブアクセシビリティのJIS基準適合レベルAAの達成を目指し、文字の大きさや色のコントラストに配慮することはもちろん、視覚に障害のある方にも可能な限り同じ情報を届けるために、テキスト中心のページ構成を採用する方針としました。



案内カードの作成

ウェブサイトだけでは情報が広がりづらいことから、QRコードを掲載した案内通知カードを作成し、全国の盲ろう者、視覚障害者、聴覚障害者に関連する施設や美術館など、約800か所に発送することにしました。また、実際に手に取って楽しんでもらえるよう、カードのデザインには、まち歩きワークショップで盲ろう者2人に検討いただいた「さわる地図」のモチーフを取り入れることを検討しました。

ただ文字で案内文を作成するだけでなく、案内カードそのものを手に取ることで、事業の追体験が可能となるようデザインを工夫した点が、事業の魅力を発信する大きな要素となりました。これらの取り組みは、企画やワークショップを通じて、ディレクターやデザイナーとともに積み上げてきた成果といえます。



振り返り会

ウェブサイトと案内通知カードが完成し、検討委員のみなさんに確認していただく時間を設けました。また、年間を通した振り返りとして、それぞれの意見交換も行いました。

北川さんは、まち歩きについて次のように振り返りました。「いろいろさわられて良かったです。以前、他の観光地に行ったことがあります。さわることができませんでした。食べるものはとてもおいしくて良かったです。」

学生たちは次のような意見を共有しました。「盲ろう者は遠い存在に感じていましたが、同じ視点で同じものを楽しめると実



感じました。『ケアしあう』というテーマ通り、自分たちも盲ろう者の方々にケアされたと感じました。」また、「ウェブサイトについてですが、ウェブを見れば全てが分かると思っていましたが、盲ろう者について調べても情報がほとんど見つかりませんでした。ウェブサイトを作ることが重要だと感じましたし、制作を通じてさまざまなことを知ることができました」という振り返りもありました。

野中さんは「学生のみなさんが初めて盲ろう者と出会った時と、今日では、盲ろう者との接し方が、短い期間だったが全然違う。積極的に関わってくれているのが分かった」とコミュニケーションを積み重ねてきた学生の変化について触れられ、萩原さんは「デザイナーやディレクターが、こんな風に形を作ってくれるのかと初めて知ることも多かった。もっとこんな機会が増えるといいなと思った」と関わる人の広がりについて今後の期待を語られました。デザイナーの南さんは「コミュニケーションの難しさ、情報を伝えることの難しさを感じた。お二人が明るい方というのが印象的だった。」と盲ろう者との出会いを振り返りました。全体の総括としてディレクターの竹岡さんからは「伝えることの大切さ、適切に伝えることの難しさを感じたり、伝えるときの工夫について考える機会になった。まちあるきでは、身近なところでこれだけ楽しめることがあるということに気づけた。世界の見方が変わることにつながると思う」と事業を通して自身の価値観の変化や気づきを振り返りました。

(5)考察

令和5年度の同事業では、盲ろう者、学生、支援者が関わり合うことで、相互に新たな気づきや考えを深める視点が生まれました。お互いを知ることによって安心できる環境を築くことは、アクセシビリティの観点でも重要であり、特に次世代を担う大学生と盲ろう者がともに事業を実施する意義を確認することができました。

今年度も大学生の検討委員を募集し、5名の学生に参加していただきました。今年度は、盲ろうについて学が勉強会を実施したり、昼食を共にする機会が増えたことで、盲ろう者、学生、支援者の間で気づきや考えを深め合う視点がさらに広がりました。また、ディレクターやデザイナーが参加し、まち歩きワークショップ当日には実行委員も加わり、意見交換が活発に行われた結果、気づきや考えを深める視点が多方面に広がりました。

一方、今後の課題としては、今回のワークショップがまち歩きの安全性確保を重視するため少人数での実施となり、一般参加者の募集が行われなかった点が挙げられます。従来からの課題である、より多くの盲ろう者が参加できる機会の創出という点では、依然として不十分であると言わざるを得ません。

体験の質に関しては、さわったり食べ比べたりといった活動を通して、新たなまち歩きの価値観を創出する成果が得られた一方で、盲ろう者がまちの良さを紹介するなど、盲ろう者ならではの視点を活かしたまち歩きには、さらなる検討の余地が残されています。今後取り組みを進める中で、資源の充実や地域住民の理解促進に努め、アクセシビリティ向上に継続的に取り組んでいきたいと考えています。

第2章 糸賀一雄研究・普及啓発活動事業について

1 事業目的

糸賀思想の普及・啓発に関する取り組みから、障害福祉のさらなる発展につなげることを目的として実施するものです。

特に若い世代の福祉職員や福祉分野以外から転職した職員が共通して持つ課題の一つである「目の前の支援に追われ、他の実践を知る機会が少ない」ということに対応し、糸賀思想が通底している実践が多くあることを身近に知る機会を創出すること、および実践者同士のネットワークを構築し、障害福祉の発展と地域福祉の推進につなげます。

2 活動内容

①ウェブサイト「SHIGA-FUKU」の運営

・実践者インタビュー

障害福祉分野をはじめ、様々な社会問題において困難な状況にある方々を支援し、福祉の思想を地域で実践する滋賀県内の実践者たちに焦点を当てたインタビューを発信しています。

今年度は3名のインタビューを実施し、2名の記事を掲載しました。

・イベント情報の収集・掲載

障害当事者等様々な人が参加できる滋賀県内で開催される福祉に関するイベント、研修会等の情報を発信しました。今年度は5件のイベントを掲載しました。

・県内福祉事業所一覧の情報の更新

障害福祉サービス事業所等一覧の情報を更新しました。

成果と考察

SHIGA-FUKUは最初のインタビュー記事を掲載してから(2018年7月)、6年が経過しました。この間、前事業で実施した分を含め、73名、2事業のインタビューを実施してきました。実践者の活動範囲は滋賀県全域にわたり、対象分野も障害分野だけに留まりません。福祉施設で働くスタッフはもちろん、居場所づくり、当事者、アーティストなど、多彩な分野で活躍する人々をクローズアップしてきました。

インタビューでは、その方々の経歴や事業に取り組むきっかけなど、人物像や事業内容について、可能な限りご本人の言葉を大切に掲載しています。そのため、新たに事業を広めたい方や、事業を立ち上げたばかりの方からは、「自分のことを第三者に紹介してもらえる媒体ができるのはありがたい」といった声をいただきました。また、インタビュー記事を見た人から、「研修講師として招きたい」といった声が寄せられ、このSHIGA-FUKUを通して新たなつながりが生まれました。

次にSHIGA-FUKUの運営状況についてです。Googleアナリティクスを活用して閲覧者数など分析を行いました。月によって閲覧者数のばらつきはあるものの、月平均5833人のアクセスがありました。イベントを掲載した月には、アクセス数が増えるなど、一定数の効果も見られました。新たに記事がアップされたときは、新しい記事の閲覧者数が増えることはもちろんですが、着目したいのが、年間の閲覧者で最も多かったのが医師のインタビュー記事であるという点です。病院を利用する際に病院の情報や口コミを調べることは今や当たり前になっています。病院名を検索すると医師のインタビューが出てくることは、病院や施設を利用する前に、どんな医師が診察しているのか、どんな思いで日々働いているのかを知ることができます。福祉施設のスタッフのインタビューについても同じことが言えるのではないのでしょうか。自分自身もしくは身近な人が施設を利用する際に、その施設がどんなところなのか、どんな人が働いているのかが見えることは、安心につながると考えられ、結果として社会資源を安心して利用するために活用できるツールとしての可能性も見えてきました。

ウェブサイト「SHIGA-FUKU」インタビュー記事について

インタビュー圏域

大津圏域	21	東近江圏域	11	湖西圏域	2
湖南圏域	15	湖東圏域	9	県外	1
甲賀圏域	12	湖北圏域	4		

分野(複数該当あり)

障害	50	相談	7	ひきこもり	1
高齢	8	医療	7	行政	1
地域	15	生活困窮	2	依存症	2
当事者	7	芸術	5	難病	1
児童	17	成年後見	1		

SHIGA-FUKU アクセス数分析

閲覧者数(2024年4月～2025年2月) 6.4万人

月ごとの平均閲覧者数(2024年4月～2025年2月) 5,833人

最も閲覧者数が多い月 7,376人

一番閲覧されたインタビュー記事 佐藤有美(さとう・ゆみ)さん おさだファミリークリニック 861人

一番閲覧されたページ 実践者インタビュートップページ 1,282人

課題

今年度のインタビュー実施数は3回でした。SHIGA-FUKUは福祉実践者のインタビューをメインコンテンツとしていますが、年間の掲載数が少ないことが課題として挙げられます。アクセス数の向上のためにも、更新頻度を上げることが必要不可欠であり、今後は掲載数の増加に注力していきたいと考えています。

イベント掲載数についても、例年3～5件にとどまっており、取り組みを強化したいポイントとなっています。社会福祉法人など、多くの団体がウェブサイトを運営していますが、集客に力を入れたいイベントについては、他に掲載できる場所を検討することもあります。しかし、イベント掲載が有料であったり、複雑な手続きが必要であったりする場合があります。

一方、SHIGA-FUKUのイベント掲載は費用がかからず、メールや電話で掲載情報を送るだけで気軽に依頼できるようになっています。しかし、現在の掲載数は年間5件にとどまっており、背景には、イベント掲載が可能であることが十分に知られていない、またはSHIGA-FUKU自体の認知度が低いことが要因として考えられます。

今後はインタビュー数の増加に加え、イベント情報をこちらから収集して掲載するなど、SHIGA-FUKU自体の認知度向上に向けた取り組みを強化していきたいと考えています。

②トークイベントの開催

滋賀で福祉または福祉的な実践をしている実践者と交流できる機会を創出することを目的に、過去のインタビューを講師に招き、トークイベントを開催しました。

「SHIGA-FUKUトーク～ものづくりから広がる福祉の可能性～」

日時:令和6(2024)年11月17日(日)10:30～12:00

場所:酒游館(近江八幡市仲屋町中6)

参加人数:10人

開催趣旨

「ものづくりから広がる福祉の可能性」と題して、福祉の実践の場で「ものづくり」に取り組んでいる岩倉絹枝さん、高田優さんにご登壇いただき、トークイベントを実施しました。このイベントは、滋賀県内の福祉実践者の存在や取り組みを知り、ネットワークづくりのきっかけを作ることを目的としています。現在では、切っても切れない関係といえる「福祉」と「ものづくり」。お二人の実践をクロストークで深め、来場者との質疑応答も行いました。また、会場の外で開催されていたマルシェに出店して、福祉の現場で生まれた様々なグッズを販売しました。



登壇者&プロフィール



岩倉 絹枝 Iwakura Kinue (オンラインショップ「コドモフクひよこ屋」代表)

SHIGA-FUKUインタビュー登場 2022年9月1日

<https://careservice-shiga.com/2022/09/01/iwakurakinue/>

息子の入院をきっかけに、病気や障害のある子どものための介護用子供服のネットショップを立ち上げる。国内外からデザイン性と機能性に優れた商品を集めて販売するセレクトショップとしてキッズデザイン賞2020受賞。現在は子供服を通じた発達障害へのサポートにも力を入れている。

高田 優 Takada Yu (ハンドメイドブランド兼福祉プロジェクト「Opull」代表)

SHIGA-FUKUインタビュー登場 2024年10月28日

<https://careservice-shiga.com/2024/10/28/takadayu/>

「ものづくりと役割はひとを元気にする」をテーマに、作業療法士兼手芸作家として地域で活動。“Opull”の屋号で、医療福祉の場や地域の間でものづくりワークショップや商品販売を行う。手編みのケア用品を作るボランティア“しがケアマフの会”も運営している。



クロストーク

岩倉 高田さんは病院という安定した職場で働かれていたと思うのですが、フリーという道を選んだ一番の理由はなんですか？

高田 病院で働きながら、今やっているような取り組みができないかと相談したこともありましたが、でも、なかなか難しくて……。そんなとき子どもが生まれて、育児と仕事の両立がともしんどく感じました。2人目ができたとき、同じことを繰り返したら仕事も中途半端、育児も中途半端になると思って、自分でやってみようと思ったんです。

岩倉 フリーになられて、一番よかったことはなんですか？

高田 自分のやりたいようにできることです。それまでは、敷かれたレールの上を歩いてきた人生やったなと思うんです。大学行って、普通に就職して。でも、子どもが生まれたことで、自分の人生、もう引き返せへんなって思いました。「人生一度きり」の意味がずっとわからなかったのですが、今、自分のやりたいことをやらなかったら、「ずっとこのまま」って。すると、自分のやりたいことが、どんどん明確になっていきました。「ええやん」って言うってくれる人がこの2年でどんどん増えているんです。自分の「こうしたい」が認められているなと感じています。

岩倉 作業療法士として提供したいものが根底にありながら、ご自身の幸せとか、自己実現みたいなものを両立しているところがすごいなと思いました。日本では、そういった場合、ボランティアのような活動になってしまうことが多いですね。

高田 ボランティアについても勉強しました。ケアマフをつくるのはボランティアで、お金にはならないんです。ボランティアは利他的な精神でやる人が多いのですが、結局は自分が誰かの役に立ってうれしいという思いがあるからできるんだと思います。岩倉さんは、日本にないものを探して、集めて販売していて、すごいですね。きっかけはお子さんでしたが、今では違いますよね？

岩倉 子どもが退院した後は必要なものはなくて、今は、私が純粋に楽しいから続けています。起業したころは、仕入れができなくて、海外しか道がなかったんです。でも、探しまくってたら、すごく楽しくて。「こんなかわいいグッズがあるんや」「こんな便利なのがあるんや」って。私が買って、日本のみんなに教えてあげよう！って思いました。リサーチしてるだけで、気がついたら夜が明けてたこともあります。今では、趣味に近いのかも(笑)。

高田 今は、ネットで誰もが商品を探せる時代ですね。日本人って、どこかガッツで乗り切ろうとするところがあるように感じます。「頑張れ」も大事だけど、頑張れへん人は、便利なツールをいくらでも使ったらいいと思います。さっきの靴下もそうですし、補助具もそう。使うことで外に出ようと思ったり、体を動かすきっかけになったら、すごくいいリハビリになるんです。

岩倉 便利なグッズはいろいろあるんだけど、必要とする人に情報が伝わらないのはもどかしいですね。皆さんの口コミでもぜひ広めてください。

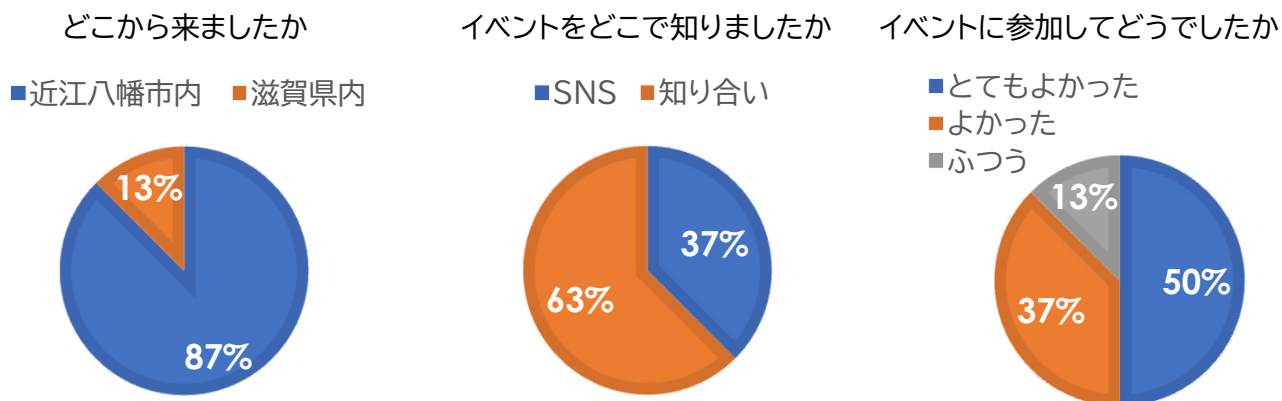
高田 日本人って必ず商品のレビューを見ますよね。レビューのない海外サイトは、やっぱり怖い。岩倉さんが仕入れて、たくさんレビューが掲載されているサイトを運営されているのは、安心だし、心強いと思います。

岩倉 ありがとうございます。頑張ります。

参加者の声

- ・ 高田さんのお話を聞いて、自分のやりたいことを明確にする＝自己実現が、福祉や人との出会いを通じて可能になることが素敵だと感じました。福祉対象の相手であっても、喜んでくださる人がいるなら、ビジネスとして堂々と誇りを持って取り組むというお話に、大変共感し、学びを得ました。
- ・ とても良いイベントでした。第2弾を来春頃に開催していただけると嬉しいです。
- ・ 高田さんの「(成人や高齢者の施設などで)作ったものが子どもっぽい、作業が幼い」という現状に違和感を抱いているという点に強く共感しました。そのうえで、同じテーブルを囲むことで始まるコミュニケーションや空間づくりに感銘を受けました。
- ・ 参加して良かったです。新たな良い出会いにつながると嬉しいです。
- ・ 知らなかったことがたくさんあり、大変勉強になりました。高田さんと岩倉さん、どちらのトークもとても分かりやすく、聞き取りやすかったです。大変楽しく、興味深く聞かせていただきました。お二人とも飾らない雰囲気好感を持てて良かったです。
- ・ 全体的に「福祉」のカラーが強く、知らない立場の私には大変勉強になるイベントでした。「福祉」の現状や、福祉とものづくりについて知らない人も、もっと気軽に参加できるようになると良いと思いました。

アンケート結果(回答者8名)



考察

本イベントは、実践者と参加者がつながることを目的として実施しました。前年度まではオンライン形式で開催しましたが、本年度は、直接会場で出会うことができる形で実施しました。実施にあたり、登壇者と参加者の距離を縮める雰囲気づくりを重要視し、具体的には、登壇者のお二人には講演会形式ではなく、ありのままのトークをしていただくようお願いし、フラットな雰囲気を意識しました。

トーク後には登壇者への質問時間を設け、コミュニケーションを図りました。また、会場の横で開催されたマルシェにGLOWブースを出展し、高田さんには商品を販売していただくことで、トーク後もコミュニケーションが取れ、実際に商品を手に取って見る機会を提供しました。さらに、どなたでも参加しやすいイベントづくりを目指し、UDトークを利用した文字サポートを導入しました。また、イベントアンケートはやさしい日本語(短い文章、分かち書き、わかりやすい表現、見やすい文字の形、ふりがな)で作成し、子どもや日本語の理解が難しい人の参加があった場合も記入しやすいようにしました。

成果

・実践者同士のつながり

今回、登壇していただいた岩倉さん、高田さんはお互いの活動領域に違いがありながらも、イベント当日にお互いの商品を見たり、起業した当時や現在の活動に語り合うことで、お互いにエンパワメントされる機会が生まれました。

・参加者とのつながり

質問コーナーでは、参加者が、高田さんに運営している施設に来てもらうには？という質問がありました。結果、高田さんが施設に訪問するプログラムが実現したという声がありました。

他にも、このイベントを通じて、実践者同士のつながりだけでなく、参加者とのつながりも生まれました。

課題

・集客

県内の障害福祉施設など約500か所にチラシを配布し、グローのホームページやSHIGA-FUKUウェブサイトに掲載しました。当初は20～30名の参加を想定していましたが、実際の参加者は10名でした。主な要因としては、午前中の開催であったこと、事前申込制であったこと、さらに同日に近隣で複数のイベントが開催されていたことなどが考えられます。また、福祉従事者の参加を想定していたものの、業務時間外や休日に働く分野に関連するイベントへの参加はハードルが高い可能性があります。そのため、平日の夕方に開催することや時間帯の工夫、研修としての実施を視野に入れるなど、実施形態の検討を進めていきたいと思います。また、参加者の声にもあったように、テーマによっては福祉以外の領域への広報も視野に入れていきたいと思います。

・情報提供

UDトークによる文字サポートについては案内していたものの、当日サポートを必要とされる方はいませんでした。手話通訳やカームダウンスペースのように、必要なサポートは参加者ごとに異なりますが、合理的配慮の観点からも「参加したい人が参加できるイベントづくり」を目指して、今後も継続して取り組みたいと考えています。

今後はチラシに「その他、サポートや配慮が必要な場合はお気軽にお問い合わせください」といった文言を追加するなどして、参加希望者が問い合わせしやすい環境を整えることで、さらなる集客につなげたいと思います。

ウェブサイト「SHIGA-FUKU」はこちらからアクセスできます。



<https://careservice-shiga.com/>

第3章 障害児・者等の文化芸術による 共生社会づくり研究事業について

1 事業目的

県内において障害児入所施設(信楽学園)の子どもやフリースクールに通う子どもなどを対象に、文化芸術・表現活動を通して、児童の自己肯定感、自己効力感を高めることや、児童の自己表現する力を伸ばしていくことを目的に、文化芸術・表現活動ワークショップを展開しました。

2 研究課題

障害児入所施設やフリースクールに在籍している子どもの中には、本来、成長する過程で周囲との健全な関わりによって生まれる自己肯定感が、障害特性や生育環境など様々な要因によって十分に育まれず、社会生活において何らかの形で生きづらさを感じていることが少なくありません。子どもたちが自立し安定した社会生活を送るためには、自己肯定感、コミュニケーション能力の向上が必要と考えます。本事業では文化芸術活動を通して自己表現や自己実現が生まれ、子どもたちの自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を目指すとともに、子どもたちが抱える生きづらさの解消につながる処方进行研究しました。また、幸せな生活を送るために不可欠な文化芸術活動を、施設等において持続可能なプログラム運営とするための方策について、併せて研究しました。

3 事業内容

(1)芸術プログラムの実施

音楽、ダンス、美術の分野から、これまで事業などで関わりのあったアーティストを講師として招き、月に4回ほどプログラムを実施しました。プログラムを構成するにあたり、講師の事前施設見学、信楽学園担当者との事前打ち合わせ、プログラム終了後の振り返りを通して、回を重ねるごとに内容のブラッシュアップを試みました。

(2)文化芸術に関する調査・研究

事業開始前と終了後に信楽学園の児童と職員を対象とした、文化芸術に関するアンケートを実施し、児童の文化芸術へのイメージ、職員の障害者の文化芸術に対する意識について調査し、プログラム実施による効果の可視化を目指しました。

また、プログラムごとに振り返りを実施し、児童のニーズに沿ったプログラム内容とは何かについて検討しました。

(3)職員との共同企画・運営

本事業をきっかけに施設職員が障害のある人の文化芸術活動の必要性や意義について考えること、文化芸術活動が施設のプログラムとして定着し持続可能な取り組みとなることを目指し、共同での企画、運営を行いました。

信楽学園での実践

(1)導入編

①スケジュール

	実施日	内容	講師	参加者
1	5月14日(火)	オリエンテーションと 打楽器演奏鑑賞	中谷満氏 改發麻衣氏	児童9名 信楽学園職員6名
2	5月16日(木)	音楽・ダンスについて 音楽クイズ	地域共生部	児童8名 信楽学園職員6名
3	5月21日(火)	美術について 土鈴に絵付け	地域共生部	児童9名 信楽学園職員6名



(2)音楽ワークショップ

①スケジュール

	実施日	内容	講師	参加者
1	6月4日(火)	①まねっこリズム ②ボディーパーカッション	改發麻衣氏 野村萌氏	児童8名 信楽学園職員6名
2	6月11日(火)	①まねっこリズム ②カホン体験 ③ボディーパーカッション	改發麻衣氏 佐藤けやき氏	児童8名 信楽学園職員6名
3	6月13日(木)	①まねっこリズム ②打楽器体験 ③ボディーパーカッション	中谷満氏 改發麻衣氏	児童8名 信楽学園職員4名
4	6月18日(火)	①まねっこリズム ②好きな楽器で3.3.7拍子 (笑点のテーマ) ③ボディーパーカッション	改發麻衣氏 佐藤けやき氏	児童12名 信楽学園職員2名
5	6月20日(木)	①まねっこリズム ②好きな楽器で3.3.7拍子 (大きな古時計) ③ボディーパーカッション	中谷満氏 改發麻衣氏	児童11名 信楽学園職員3名
6	6月25日(火)	①まねっこリズム ②ボディーパーカッション (ステージで演奏)	改發麻衣氏 佐藤けやき氏	児童8名 信楽学園職員6名

手作り楽器～アンサンブル～発表会

	実施日	内容	講師	参加者
1	7月2日(火)	手作り楽器 ①ペットボトルでマラカス作り ②できた楽器に着色・装飾	地域共生部	児童8名 信楽学園職員6名
2	7月18日(木)	手作り楽器 ①バケツで太鼓作り ②できた楽器に着色・装飾 ③できた楽器でまねっこリズム	地域共生部	児童9名 信楽学園職員4名
3	7月30日(火)	手作り楽器 ①トンガトン作り ②竹を節を1つ着いた形に短く切る ③できた楽器に着色・装飾	地域共生部	児童10名 信楽学園職員4名
4	8月1日(木)	①今まで作った楽器でサンバ練習 ②「風になりたい」に合わせて合奏 ③ハンドベル演奏	改發麻衣氏 野村萌氏	児童7名 信楽学園職員4名
5	8月6日(火)	発表会にむけて ①ボディーパーカッション復習 ②手作り楽器でリズムアンサンブル ③「RPG」に合わせて合奏 ④「旅立ちの日に」合唱	中谷満氏 改發麻衣氏	児童7名 信楽学園職員4名

	実施日	内容	講師	参加者
6	8月8日(木)	発表会にむけて ①ボディーパーカッション復習 ②手作り楽器でリズムアンサンブル ③「RPG」に合わせて合奏 ④「旅立ちの日に」合唱	改發麻衣氏 野村萌氏	児童8名 信楽学園職員4名
7	9月3日(火)	発表会にむけて ①ボディーパーカッション復習 ②手作り楽器でリズムアンサンブル ③「RPG」に合わせて合奏 ④「旅立ちの日に」合唱	中谷満氏 改發麻衣氏	児童12名 信楽学園職員2名
8	9月5日(木)	発表会(信楽学園体育館) ①手作り楽器でリズムアンサンブル ②「RPG」に合わせて合奏 ③「旅立ちの日に」合唱 ④ボディーパーカッション ⑤ハンドベル「きらきら星」 ⑥一本締め(一丁締め)	中谷満氏 改發麻衣氏	児童12名 信楽学園職員2名

②プログラム概要

導入

ワークショップでは、トライアングルやタンバリンなどの楽器を紹介し、模範演奏を行いました。参加者はこれらの楽器に強い興味を示し、実際に触れることで、各自が好む楽器を見つけることができました。



まねっこリズム

講師が提示したリズムを参加者が模倣する活動では、参加者が順番にリズムをリードする形式へと発展しました。リズム表現は当初手拍子のみでしたが、足、お腹、頭など身体全体を使うようになり、表現の幅が広がりました。また、「メロンパン＝タタタタ」といった身近な言葉をリズムに乗せる遊びも行われました。



ボディーパーカッション

初回から「ロックトラップ」という楽曲を使用し、ボディーパーカッションのパフォーマンスを行いました。回を重ねるごとに難易度を上げましたが、最終的には発表会で演奏を披露するまでに至りました。



手作り楽器

ペットボトルマラカスやバケツ太鼓の制作では、手順に従って作業を進める参加者と、独創的な楽器を作る参加者が見られました。

その他

ワークショップを通じて、ピアノ、木琴、ギター、ドラムなどの楽器に興味を持つ参加者が現れ、これらの楽器の演奏方法などについて質問する場面が見られました。



③振り返り

講師

中谷満

京都市立芸術大学音楽学部打楽器科卒業。同年大阪フィルハーモニー交響楽団に入団。1977年より一年間、旧西ドイツ国立芸術大学に留学。ベルリンフィル首席ティンパニ奏者W.テールヘン氏、及び国立ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団首席打楽器奏者K.キスナー氏に師事。帰国後、大阪フィルに復団。相愛大学教授。



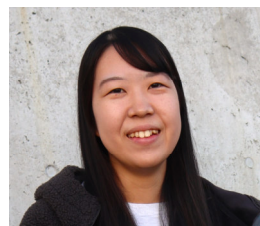
改發麻衣

同志社女子大学学芸学部音楽学科卒業。同大学音楽学会《頌啓会》特別専修課程修了。これまでに水流恵美子、清水美紀、西岡まり子、北川皎、中谷満、山口恭範の各氏に師事。糸賀一雄記念賞音楽祭大津ワークショップサポーター。

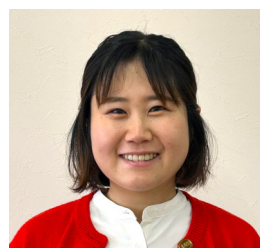


参加者

坂尻あづき
滋賀県立信楽学園職員 文化芸術活動プログラム担当



山邊まみ 進行
社会福祉法人グロー法人企画局地域共生部



【ワークショップ振り返り】

山邊 文化芸術プログラム「音楽」の講師を依頼された時はどう思われましたか？

中谷 最初は具体的なイメージが全く湧きませんでした。自分たちにできる範囲で協力できればと思っていました。以前、近江学園で子どもたちと触れ合った経験があり、その時の出会いが心に残っていたことも大きかったですね。

改發 普段の音楽活動とは違い、音楽がやりたくて集まっている子どもたちではないという点が、私にとって大きな違いでした。子どもたちの気持ちを大切にしながら、一緒に音楽を楽しめたらと思っています。

山邊 プログラムを進めていく中で、何かポイントにしていことはありますか？

改發 参加したくない子もいる中で、無理強いはいしたくなかったです。でも、そこにいてくれるだけで嬉しいので、常に視界に入れるようにしていました。

子どもたちの自主性を尊重することで、指導するというよりは、子どもたちがやりたいことをサポートするという意識でいました。例えば、合奏の曲も、子どもたちが好きなRPGの曲を取り入れました。休憩時間に何度か話しをすることで、少しずつ距離が縮まったように思います。

中谷 楽器を作ったり、リズム遊びをしたり、メロディーを演奏したりと、手探りの状態から始めました。子どもたちが少しでも興味を持てるように、色々な要素を取り入れてみました。身近な言葉のリズムを音楽に取り入れました。

演奏会をやってみようかというアイデアがありました。難しいかと思っていましたが、ある日のワークショップの休憩時間に子ども1人ひとりにそれぞれ違う単純なリズムを重ねて遊んでいたら、学園長が飛び込んできて、なんか音楽が聞こえますって言われました。遊んでるつもりだったのに。

その時にこの子たちなら演奏会でもできるだろうと思いました。

山邊 プログラムを通して、職員から見て子どもたちにどのような変化がありましたか？

坂尻 最初は講師の方と子どもたちという関係でしたが、徐々にみんなで演奏する形に変化していきました。普段の学園生活では見られない子どもたちのドラムを叩いたり、ピアノを弾いたりする姿を見ることができたのは、私たち職員にとっても良い経験でした。

山邊 プログラム後、子どもたちは音楽にどのように関わっていますか？

坂尻 寄付していただいたドラムを叩いたり、体育館で楽器を鳴らしたりと、今も継続的に楽器にふれています。寮にあるピアノで好きな曲を弾きたいと言う子どももいます。

子どもたちが好きな曲をみんなで演奏する機会があれば、もっと積極性が増すのではないかと感じています。

山邊 子どもたちは、講師の方々との出会いをどのように受け止めていましたか？

坂尻 子どもたちは、先生方の名前を覚えて、「今日は誰が来るの？」と尋ねるなど、会うことを楽しみにしていました。

山邊 今後、もしワークショップをするとしたら、どのようなことに取り組んでみたいですか？

中谷 まず楽器とその楽器にすぐさわれるような音楽室のような環境を整えることが必要です。そこでやりたい楽器を講師がいない時も自主的に練習する。その延長に演奏会を開いて、曲も子どもたちのアイデアを取り入れていこうと思います。

改發 今回は子どもたちが知っていそうな曲を、こちらで選曲しましたが、次は子どもたちがやりたい曲をやっていけたらいいと思います。音楽をやるだけではなく、みんなで話し合う時間があってもいいと思います。

坂尻 みんな何かしらの音楽は聴いているので、好きな曲を持ち寄ってみんなで聴くっていう時間があってもいいかなと思います。曲を流す中で楽器を持って自由に鳴らす子がいてもいいと思いますし、楽譜とかにも興味を持ってくれるとうれしいです。音楽会やコンサートに行くというのもいいと思います。



(3) ダンスワークショップ 信楽フェス

①スケジュール

	実施日	内容	講師	参加者
1	9月24日(火)	①導入・講師自己紹介 ②フェス準備	北村成美氏	児童10名 信楽学園職員4名
2	9月25日(水)	①フェス開始 ②片付け	北村成美氏	児童10名 信楽学園職員6名
3	10月1日(火)	①フェス準備 ②音楽をかけてイメージ作り	北村成美氏	児童13名 信楽学園職員5名
4	10月2日(水)	①フェス開始 ②片付け	北村成美氏	児童10名 信楽学園職員6名
5	10月15日(火)	①リクエスト曲の紹介 ②フェス準備	北村成美氏	児童9名 信楽学園職員4名
6	10月16日(水)	①フェス開始 ②片付け	北村成美氏	児童8名 信楽学園職員7名

②プログラム概要

プログラムは2日間の日程で構成され、1日目が準備日、2日目がフェスティバル本番を1クールとして、それを3回実施しました。

準備日

部屋の飾りつけ、衣装の準備、使用する楽曲の選定などを行いました。リクエスト曲を流す担当は「DJ」、座っている児童は「VIP」(鑑賞者)という役割を担いました。



フェスティバル本番

フェスティバルは回を重ねるごとに、サメの着ぐるみを着る児童が現れたり、リクエスト曲数が6曲から10曲、最終的に12曲に増えたり、「VIP席」では当初5人の児童が座っていたのが、回を追うごとにリクエスト曲が流れるとスピーカーに近づく児童や、自ら写真撮影係をする児童が出るなど、参加の仕方に変化が見られました。



③振り返り

講師

北村成美

6歳よりバレエを始め、1992年、英国ラバンセンターにて振付を学ぶ。「生きる喜びと痛みを謳歌するたくましいダンス」をモットーに、国内外でソロダンス作品を上演するほか日本各地で市民参加によるコミュニティダンス作品を発表。劇団やダンスカンパニーへの振付、音楽家や美術家との共同製作にも数多く取り組んでいる。平成15年度大阪舞台芸術新人賞、平成22年度滋賀県文化奨励賞を受賞。



参加者

坂尻あづき

滋賀県立信楽学園職員 文化芸術活動プログラム担当

山邊まみ 進行

社会福祉法人グロー法人企画局地域共生部

【ワークショップ振り返り】

山邊 文化芸術プログラム「ダンス」の講師を依頼された時はどう思われましたか？

北村 信楽学園の名前は知っていましたが、実際にどのような人たちがいて、どのような生活を送っているのかは全く知りませんでした。そのため、私が受け入れてもらえるのか、プログラムがどのように展開できるのか、正直なところ、不安と期待が入り混じった気持ちでした。ダンスを通じて何が生まれるのか、全く見えない部分もあり、ドキドキしましたが、同時にワクワクする気持ちもありました。

山邊 実際に子どもたちと関わってみて、印象に変化はありましたか？

北村 音楽のワークショップを見学した際、子どもたちが音楽に親しんでいる様子を見て、フェス形式でのプログラムを思いつきました。ダンスは音楽と比べて少し抽象的な表現方法ですが、音楽とダンスを融合させることで、子どもたちがより参加しやすく、楽しめるのではないかと感じました。子どもたちの姿を見て、様々なインスピレーションが湧いてきました。

山邊 フェス形式のプログラムは、最終日に向けて練習を重ねるのではなく、リハーサルと本番を繰り返す形で実施されていましたが、その意図について教えてくださいませんか？

北村 生活の中にそういう時間っていうのを常態化させて、しかもそれが繰り返されることによって、じゃあ次やるんだったらもっとこうしたいなみたいな、1人ひとりの創意工夫みたいなことが引き出せるか、逆に飽きてプログラムに来なくなる子も出てくるかなと思いました。でも、この信楽学園の生活の中に、ある期間、「フェス」ということが、起こるっていうことが、すごく大事だなと思いました。

それが、全員がその場にいられる状態かなと思います。

今日はあまり乗り気じゃないし、自分の部屋に戻りたい。でも会議室では「フェス」をやってるんだと思うことが、すごく大事かなと思います。

山邊 今後、もしワークショップをするとしたら、どのようなことに取り組んでみたいですか？

北村 今回のプログラムを通して、子どもたちの無限の可能性を感じることができました。今後も、子どもたちが主体的に参加し、自己表現できるようなプログラムを提供していきたいです。

今回はパフォーマンスを中心とした内容でしたが、今後は子どもたちと一緒に何かを作り上げるワークショップのような形式にも挑戦してみたいですね。例えば、一緒に舞台を作ったり、衣装を考えたり、簡単な劇を創作したりするのも面白そうだと思います。

場所に関しては、体育館のような広いスペースがあれば、よりダイナミックな活動ができると思いますし、音楽室や美術室など、それぞれの活動に適した設備が整っていると、さらに表現の幅が広がるのではないかと感じました。



(4) 美術ワークショップ 展覧会をつくろう

①スケジュール

	実施日	内容	講師	参加者
1	11月12日(火)	作品作り ①導入・美術プログラムの説明 ②ピーナツマンをつくろう ③作品写真撮影	地域共生部	児童9名 信楽学園職員4名
2	11月14日(木)	①ピーナツマンをつくろう ②作品写真撮影	地域共生部	児童6名 信楽学園職員4名
3	2025年 1月14日(火)	①導入・講師自己紹介 ②「器[?]」を作ろう」	阿久根沙織氏	児童5名 信楽学園職員4名
4	1月21日(火)	①「信楽たぬき[?]」を作ろう」	阿久根沙織氏	児童7名 信楽学園職員4名
5	1月23日(木)	①自由作陶・絵付け・電動ろくろ	阿久根沙織氏	児童7名 信楽学園職員5名
6	1月28日(木)	①自由作陶・絵付け・電動ろくろ	阿久根沙織氏	児童7名 信楽学園職員4名
7	2月13日(木)	展示準備 ①展覧会のタイトルを考える ②展示方法を考える ③展示会場(第3工場)の下見	阿久根沙織氏	児童6名 信楽学園職員5名
8	2月18日(火)	①作業の役割分担を決める ②展示台などの作成	阿久根沙織氏	児童9名 信楽学園職員4名
9	2月20日(木)	①前回の作業の続き ②キャプションの作成	阿久根沙織氏	児童7名 信楽学園職員4名
10	3月6日(木)	展覧会(信楽学園第3工場) ①展示を仕上げるレクチャー ②焼きあがった陶器の窯出し ③キャプションの作成 ④展示 ⑤会場の清掃	阿久根沙織氏	児童7名 信楽学園職員5名

②プログラム概要

作品制作

児童は普段、工場作業として型通りの製品を作っていますが、今回の自由作陶では、制約から解放され、自由な発想で作品を制作することができました。その結果、美しい作品や、不思議な作品が多数生まれました。



ワークショップでは、以下の作品制作が行われました。

「ピーナツマンを作ろう」

ピーナツ、ペットボトルのキャップ、針金でベースを作り、自由に装飾しました。



「器[?]を作ろう」

粘土を手びねりで制作



「信楽たぬき[?]を作ろう」

器[?]より高度な作品ができました。



「自由作陶」

電動ろくろにも挑戦しました。



「絵付け」

素焼きの皿に筆で釉薬や絵具を使って着色しました。



展覧会準備

展覧会に向けて、什器作成・塗装・キャプション・チラシ作成・清掃・展示を行いました。



③振り返り

講師

阿久根沙織

1984年 大阪府出身2005年大阪芸術短期大学専攻修了(中学校美術教諭二種取得)のち陶芸教室勤務。技術と知識を高めるため愛知窯業技術専門学校へ。2009年専門学校修了後は3年窯元に務める。2015年、三重県伊賀市に築窯。
北海道、大阪、愛知、滋賀等各地で、窯業全般と陶芸教室や様々な施設での講師を務め、陶芸と福祉に関わる。現在三重滋賀を拠点に活動を行う。



参加者

坂尻あづき

滋賀県立信楽学園職員 文化芸術活動プログラム担当

山邊まみ 進行

社会福祉法人グロー法人企画局地域共生部

【ワークショップ振り返り】

山邊 文化芸術プログラム「美術」の講師を依頼された時はどう思われましたか？

阿久根 正直嬉しかったです。元々信楽学園で勤めていたこともあり、当時、自由創作の時間は子どもたちも楽しんでくれたかもしれないですけど、私自身もここで働く中での楽しい時間だったので。子どもは普段、型にはまった工場作業をしている中で、自由創作の時間はきっと嬉しいと思います。そこに関わらせてもらえるということでとても嬉しかったです。

山邊 阿久根さんが職員だった頃の子どもの様子と、今回会った子どもたちの様子に違いはありましたか？

阿久根 実際に作品作りをしたら、昔も今も子どもは子どもだな、一緒だなと感じましたが、時代が変わってきているから、講師としてどこまで引っ張っていいのか、一番難しかったです。もっと長く関わってコミュニケーションを取ることができれば、また違ったアプローチができたかもしれません。

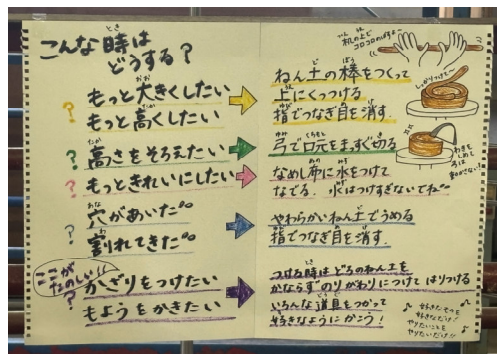
山邊 学園の職員である坂尻さんは、美術のプログラムをするにあたって、普段の工場作業とくらべて、子どもたちがやっている姿勢や感覚にどんな違いを感じましたか？

坂尻 自分が作りたいもの作っている時のワクワクしている表情であったり、こだわりを持って作り続ける集中力というのは、工場作業の時間とは全く違う様子だと思いました。

山邊 事前に手順書も準備していただきました。阿久根さんが子どもたちに対して気をつけていたことは？

阿久根 手順書を作りましたが、子どもは多分読まないだろうと思っていました。まずは粘土に触れてもらうことが一番大切だと考えていました。ただ、手順書は、指導する側の私たちの安心感には繋がったと思います。

山邊 坂尻さんは手順書についてどう思いましたか？



坂尻 子どもの手が止まった時に、子どもが手順書を見なくても、職員が読んでいれば、「次はこうするんだよ」と伝えることができました。子どもたちに声をかけやすくなり、ツールとして、とてもありがたかったです。

山邊 今回の美術プログラム全体を通して、子どもたちの変化はどのように感じられましたか？

坂尻 元々、思いを発出するのが苦手な子がいたのですが、その子から自発的に書きたいという言葉が聞けました。今回、展示という明確なゴールがあったことが、子どもたちのモチベーションに繋がったと感じています。今後、他の分野の活動を行う際にも、最後に何か目標となるものを設定してあげると、子どもたちは取り組みやすいのではないかと感じました。

山邊 今後、もしワークショップをするとしたら、どのようなことに取り組んでみたいですか？

阿久根 回数はもっと欲しいですね。職員や子どもたちともコミュニケーションを取りながら、プログラム化する方が、いいものになりそうです。

今回のように陶芸に限定せず、もっと色々な素材に触れて、様々な表現に挑戦できるようなプログラムを提供できたらいいなと思っています。粘土が得意な子もいれば、そうでない子もいるので、色々な選択肢を用意してあげたいです。

考 察

本事業を実施するにあたり、音楽分野では中谷満氏、改發麻衣氏、佐藤けやき氏、野村萌氏、ダンス分野では北村成美氏、美術分野では阿久根沙織氏という、これまで文化芸術活動に深く関わってこられた講師の方々にご協力いただきました。講師の方々は、それぞれの専門分野における豊富な知識と経験を活かし、児童一人ひとりの個性と可能性を引き出すためのワークショップを熱心の実施してくださいました。今年度は、多岐にわたる文化芸術体験を提供する33回のワークショップを実施することができました。

ワークショップを実施した滋賀県立信楽学園は、中軽度の知的障害のある概ね15歳から18歳の児童を対象とした入所施設であり、児童たちはここで、社会生活に必要な知識や技能を習得し、自立自活を目指しています。施設内には信楽焼の工場が併設されており、児童たちは日々、陶芸品の製作訓練にも励んでいます。

信楽学園の児童たちは初対面の相手に対して苦手意識を持つ傾向があると聞いていました。そのため、今回の文化芸術プログラムで、週に2回という頻度で、4～5人もの初めて会う大人が訪れ、ワークショップを行うことは、児童たちにとって少なからず負担になるのではないかと懸念していました。

予想通り、ワークショップ開始当初は、講師と受講生という関係以上のものを築くことができず、児童たちは様子を伺っているように見受けられました。しかし、ワークショップを重ね、休憩時間などに講師の方々が積極的に児童に話しかけるなど、交流を深めるうちに、徐々に打ち解けてくれるようになりました。言葉を交わす中で、児童たちの興味や関心、得意なことなどが少しずつ見えてくるようになり、講師の方々も、より児童一人ひとりに寄り添ったプログラミングができるようになっていきました。

1年間の取り組みを通して、具体的な成果を数値などで示すことはまだ難しい段階ですが、ワークショップ中の児童たちは、笑顔で活動に取り組んでいました。これは、文化芸術に触れることの楽しさや、自己表現をする喜びを、児童たちが素直に感じていたことの表れではないかと思います。

次年度のプログラム内容については、児童のモチベーションをさらに高め、自主性・積極性を引き出すために、次のような点を考慮していきたいと考えています。

- ・ 音楽会、フェス、展覧会といった具体的な目標を設定すること。

目標があることで、児童は練習や制作に意欲的に取り組み、達成感を得やすくなると考えます。

- ・ 児童からのリクエストなどを受け付け、児童が主体的に参加できる機会を増やすこと。

自分の意見やアイデアが反映されることで、児童は自己肯定感を高め、より積極的に活動に取り組むようになって考えます。

今回の事業を通して、文化芸術が障害のある児童の成長に与える影響の大きさを感じました。今後、文化芸術に触れる機会を提供することで、児童が社会生活の中で感じている生きづらさを緩和し、より豊かな人生を送ることができるようこの事業を続けていきたいと考えています。そして、障害を持つ人と持たない人が互いに支え合い、共に生きる共生社会の実現に貢献できることを目指して取り組みを続けていきます。

おわりに

前年度から継続的に実施している「地域ケアサービス推進事業」、「糸賀一雄研究・普及啓発活動事業」、そして今年度から新たに開始した「障害児・者等の文化芸術による共生社会づくり研究事業」の三つの柱を中心に、共生社会の実現を目指した多角的な活動を展開しました。

まず、「地域ケアサービス推進事業」では、盲ろう者の方々と学生が協働するまち歩きを主軸に活動を進めてまいりました。この取り組みを通じて、情報提供における表現方法の重要性や、触覚を通じた鑑賞が新たな発見や感動をもたらす可能性に気づきました。これらの学びを広く共有するため、まち歩きに関するウェブサイトを作成・公開しました。今後も盲ろう者のアクセシビリティ向上と、誰もが生きやすい社会の実現に向け、関係機関や当事者の方々と共に進めてまいります。

次に、「糸賀一雄研究・普及啓発活動事業」では、ウェブサイト「SHIGA-FUKU」の運営とトークイベントの開催を通じて、糸賀一雄氏の思想の普及と実践者間の連携強化を図りました。活動を通して、糸賀一雄氏の思想が、障害分野のみならず、地域福祉や医療、芸術といった幅広い分野の実践に深く根ざし、今なお多くの人々に影響を与えていることを再確認できました。今後も糸賀思想のさらなる普及と、それが具体的な実践活動に繋がるよう、継続的な活動に力を入れていきます。

そして、今年度から始まった「障害児・者等の文化芸術による共生社会づくり研究事業」では、滋賀県立信楽学園の児童を対象に、音楽、ダンス、美術と年間を通して合計33回のワークショップを実施しました。特に、各分野のワークショップを一定期間集中的に行う形式を取り入れました。児童たちの興味の対象が多岐にわたることは予想していましたので、音楽ワークショップで作った楽器には、装飾や絵を描くといった美術的な要素、ダンスワークショップでは、フェスで流す曲選びという音楽的要素や、部屋の装飾という美術的要素も含め、分野横断的な活動となりました。

ワークショップの回数を重ねるごとに、児童が講師や文化芸術活動プログラム自体に慣れ、作品作りの時などの表情が生き生きとしていたように感じます。

これらのプログラムを行って、特に印象深かったのは、音楽ワークショップの期間が終了した後も、数名の児童が自発的に楽器の練習をしていることです。職員に楽器を出してもらったり、寮にあるオルガンに触ったりと、音楽が彼らの余暇の趣味として定着しつつあります。今まで「聴く」だけだった音楽を「自分で演奏したい」と思ってくれたことは、この取り組みの確かな成果の一つだと考えています。もちろん、ダンスや美術のワークショップも、児童たちの内面に少なからず良い影響を与えたことと確信しています。

このような事業を今後も継続していくことで、障害のある方が社会生活で直面する困難を少しでも和らげ、より豊かで充実した人生を送れるよう、そして、これらの活動が、最終的には誰もが互いを尊重し、共に生きる共生社会の実現に繋がることを目指してまいります。

令和6年度滋賀県地域ケアサービス推進事業報告書
障害のある人の社会参加について考える
～文化芸術を通じた共同創造の試み～

2025年3月31日発行

制作・発行 社会福祉法人グロー(GLOW)～生きることが光になる～
法人企画局地域共生部
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837 番地2
TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228

発行責任者 山之内洋
(社会福祉法人グロー(GLOW)法人企画局地域共生部長)

執筆 山邊まみ
(社会福祉法人グロー(GLOW)法人企画局地域共生部)

芦田真一
(社会福祉法人グロー(GLOW)法人企画局地域共生部)

助成 令和6年度障害者地域生活移行促進事業(滋賀県)